

# 山と博物館

第43巻 第4号 1998年4月25日

大町山岳博物館

増村 征夫 写真展

星の降る里

四月十二日(日)～五月十七日(日)



写真と文 増村 征夫

安曇野は街の灯が少ないので、星空がとても奇麗です。遠くへ撮影にゆき、帰りが夜になったときにふと気づくのですが、星が降っているかに見えるのです。

安曇野の周囲には、星空の展望台ともいえる美ヶ原や北アルプスがあり、私は折りをみてもは星空を撮影に出かけます。撮影をしながら星空を眺めているのですが、日常とは違う、いろんな体験をします。

たとえば、青白い星や赤い星がまたたく様子を見ているうちに、かすかに広大な宇宙の息づかいを感じ、自分がその星空へ吸い込まれてゆくような感覚に陥ったことがあります。

また、降るような星空の下に雲海が広がっていて、ところどころ安曇野の灯が見えていることがあります。まるで、宇宙船の窓から地球を俯瞰しているような眺めです。

家にいるときも、いつも星空を気にかけています。夕暮れになると、窓から見える北アルプス北部の白馬連峰から南部の蝶ヶ岳の空に星が散りばめられてゆきます。私は、その様子をいつも眺めていました。そうしていると、つらいことがあっても忘れてしまい、心はいつものまにか、妙に懐かしい星空へ解き放たれてゆくのです。

(日本写真家協会会員)

○星空から花まで、安曇野を中心に取材した自然、六十点○会期中無休○常設展ともに通常料金○会期中の毎日曜日午後三時から四時と五月五日(こども向けに随時)、スライドをまじえての(増村征夫ギャラリートーク)開催

## 写真展 『星の降る里』 より抜粋

増村 征夫

お変わりありませんでしょうか。  
この前、安曇野で綺麗な星空が撮影できました。君に見てほしくて、写真を贈ります。

そのときは、星が降ってくるような夜空のなか、いつのまにか川霧が湧いてきて安曇野が白いベールに包まれてゆくのです。

シャッターを切りながら、私はその幻想的な景色を見つめていました。撮影できたことを喜びつつ、たった一人で眺めていて、何だか申し訳ない気がしたものです。



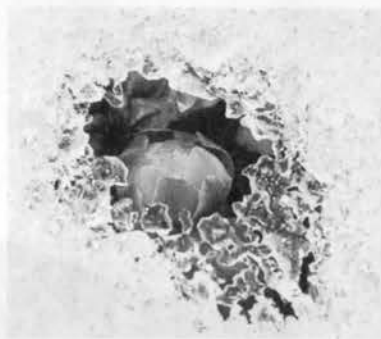
安曇野の犀川ダム湖に小白鳥を見に行つて、以前に見た、銅路湿原の丹頂鶴を思い出しました。求愛のポーズや、ほほえましい挨拶などの仕草が、どことなく似ていたのです。川に手を入れてみたのですが、まだまだ凍りつような冷たさでした。

しかし、小白鳥たちは春の気配を察知しているのでしょう。北帰行のための練習に余念がありません。頭から首にかけて、少し灰色の毛が残っている幼鳥をかばうようにして飛ぶ姿に、ほのほのとしたものを感しました。小白鳥は、日を追って幾つかの家族が集まり、より高く、より遠くへと練習飛行を重ねます。そしてある日、越冬した犀川ダム湖の上でV字型の編隊を組み、クワークワート、哀愁を帯びた鳴き声を残して北の空へ消えてゆくのです。

小白鳥を見送つてから半月ほど経つた三月半ばに、彼らのいなくなった犀川ダム湖を歩きました。ネコヤナギの、銀白色に輝く花芽から紅い雄しべが顔を出し始めていました。動植物が季節の移り変わりに敏感であること、つくづく感じました。



安曇野に遅い春がやってきました。初めは、雑木林の冬芽がふくらんで褐色に見えることに気づきました。山笑う。と俳人たちが季節に合った、冬に終わりを告げる森の表情です。雪の間からは草花が、春を待ちきれないといった顔で辺りの様子を伺っていました。これから間もなくすると芽吹きが始まって、冬將軍は遠ざかったかと思えます。しかしある朝、少し標高の高い所は真白い見事な樹氷になってることが珍しくありません。春になっても、冬と背中合わせの安曇野です。



花冷えの季節が終わる五月に入って、遅い春の雪が降りました。

安曇野の春は好天と悪天が順ぐりにやってきて、暖かさが一進一退します。寒さには慣れていますが、立夏を間近にひかえて雪になると、驚きます。

この雪は、芽吹きはじめた雑木林やカラマツの森を柔らかく包んで、バステルカラーの景色に変えてゆきました。降る雪にかすむオオヤマザクラやイタヤカエデの花に、私は言いたい感動を憶えたものです。これほど美しい花の情景を、今まで見たことがありませんでした。森は、雪だからといって冬のように厳しさはなく、生気を放っています。私は

撮影しながら、よくもまあ、自然はこんなに美しい世界を描き出すものだと思心したものです。森の中は静かで、雪が降り続くだけでした。



しかし、何と幸運な巡り合わせだったのでしょうか。昨日(1997年4月10日)のことですが、人類が今までに目撃した彗星の中でもトップクラスといわれるヘル・ボップ彗星は、北アルプス北部の空に扇や月と並んでいました。月の位置は一日で十数度も違い、この配置はたった一夜しかないのです。天候に恵まれることを祈るような気持ちで待っていたのです。



願いが通じたのでしようか。前日までの雨や風が安曇野の春霞を奇麗にたくしてくれたものですから、ヘル・ポップ彗星は、私の想像をはるかに超えた美しい星空に現れました。夢にまで見た、劇的な星空の風景です。何枚も何枚もシャッターを切りながら、何か私が撮らせてくれているにちがいないと感じました。

今日、北アルプス北部は再び雲に覆われ、山沿いほとき折り風雨に見舞われています。

安曇野は夕焼けの見られる日がほとんどありません。西の空が珊瑚色か亜麻色に淡く染まるだけです。すぐ目の前に北アルプスが連なっていますから、西の空が隠れて見えません。

中山山地と呼ばれる山並みが安曇野の東にあり、そこからは夕焼けが見えます。たおやかな山並みの向こうに横たわる北アルプスのいづれかの山に、夕日が沈んでゆきます。

黄砂で昼間から太陽が黄色く見えた日、撮影の用意をして、中山山地へ向かいました。日が西に傾くと、空の柔らかな光が、雪どけがすすんで姿を現してきた獅子や鶴、種まき爺さんといった、山腹に残った雪形を薄色に染めてゆきます。



黄砂に包まれた夕日は、地平から出たばかりの満月を思わせる黄金色でした。また、思ひもよらぬことに、鹿島槍ヶ岳の二つのピークの間に落ちてゆきました。私は、日が沈んだ後も、茫然と空を眺めていたものです。このような夕日は、もう二度と見る事ができないのかもしれない。

夜明けの空は、いつもにぎやかでした。放射状に広がる黄金色や緋色の光。凸レンズ状の光が膨らんでゆく地平線。高い空の雲と、下に広がる雲海とが交わる水平線。そこに浮かぶ鳥々。

これまで数えきれないほど私は、七色の光に彩られてゆく東の空をじっと見つづけてきました。その都度、これからのような世界が展開されるのだろうかと思わされたものです。それは、空という巨大なキャンパスに描かれてゆく、光の絵筆に他なりません。ほんのひとときしか見ることのできない絵です。これほどはかなくて美しい光景が他にあるのでしょうか。折りをみて、見に来てほしいですね。きっと、自然の中へ心が解き放たれることでしょう。



白馬岳での夜空は人影も物音もなく、ときおり風の音が通りすぎてゆくだけです。昨日、

夕暮れどきからひと晩中、星空を眺めていました。今まで出会ったことのない満天の星空だったからです。

安曇野の灯が下に見えていました。その向こうは信濃の山なみが続く、いつしかオリオンの三つ星が姿を現しています。

やがて東の空がしらみはじめると、ひとつふたつと星が消えてゆくのでした。オリオンの太陽を引く張ってくる。と言っていた友人のことを私は思い出しながら、刻々と変わってゆく光のドラマを見つめていました。白馬山荘から、点々と懐中電灯の光が揺れながら近づいてきます。間もなく夜が明けるのです。



槍ヶ岳に登ってきたのですが、雄大なプロツケン現象に出会いました。

どこまでも広がる雲海に、丸い虹に包まれた自分の影が写し出されたのです。風が強い日でしたから、大波のような雲がすぐ脇の北鎌尾根を次から次に乗り越えてゆくにつれ、プロツケン、近づいたかと思えばすぐに遠ざかってゆくのでした。

プロツケン現象に出会うには、ちよつとしたコツがあるのです。それは高山の稜線に立

って、稜線を境に、太陽と霧や雲が対峙したときがチャンスです。つまり、その霧や雲がスクリーンとなって、丸い虹に包まれた自分の影が映し出されるのです。ですから私は、条件がそろったときは霧や雲の流れを注意ぶかく見えています。

高山では他にも、珍しい虹に出会いました。たとえば、日暈、月の暈、彩雲などです。気象の変化が激しいからこのような自然現象がよく現れるのでしようが、いつも思いがけず出会うものですから、ますます山のとりこになっけていきます。



白馬岳山麓の、小さな沢でトガクシシヨウマに出会って、花の美しさに見惚れました。あたりは、雪どけ水の音が風に運ばれてかすかに聞こえてくるだけで、静寂そのものでした。

幻の花と呼ばれるトガクシシヨウマは、私にとっても、久しくそうであった花です。今まで毎年のように、昔はあったと聞く白馬連峰の幾つもの尾根や沢を登り、残雪を踏み抜いて足を痛めたり、道に迷ったりしながら探し歩いた花でした。しかし、いずれの年も一株すら見つけることは出来なかつたのです。

撮影に夢中になると、遠くから物音が聞こえてきます。周囲を見回すと、雪渓を隔てた三百メートルほど先のダケカンバの木の下に、熊がいるではありませんか。おそろく、ネマガリダケの子を食べているのでしょう。ちよつと不安がよぎりました。が、やがて熊は、私の心配をよそに視界から姿を消してゆきました。訪れる人もいないこのようなどころだからこそ、トガクシシヨウマが残っていたにちがいありません。



先日、すでに紅葉が散りはじめた湖沢に星の撮影に出かけました。湖沢カールの底にテントを張ったのですが、予想にはずれて、穂高の峰々は雲に隠れていたのです。夕方になっても天候は回復せず、青空はおろか、天気もよくなる気配はありません。私は撮影をあきらめ、明日の夜に期待して今日は早く休もうと思っていたときです。ふと気になってテントの外を見ると、目を疑いました。あの雲はどこへ行ったのか、シルエットになった穂高の稜線に深い群青の空が広がり、星がいっぱい煌めいているのです。

安曇野は急に空気が澄みわたって、朝露が降りるようになりまし。まだ十月に入ったばかりなのですが、大陸から高気圧が張り出してくるたびに、寒さが増してくるので。この季節は、朝露が凍りかけていることがあるかと思えば、霜が降りてあたり一面が真っ白になることもあります。ですから私は、晴れて風のない夜に地表の熱が奪われる放射冷却現象が起きそうな日には、朝早く起きて野山を歩きます。思ったとおり、冬支度に入った千草の草紅葉が霜に緑どられていたりすると、カメラをセツトして、朝日が射すのを待っているのです。



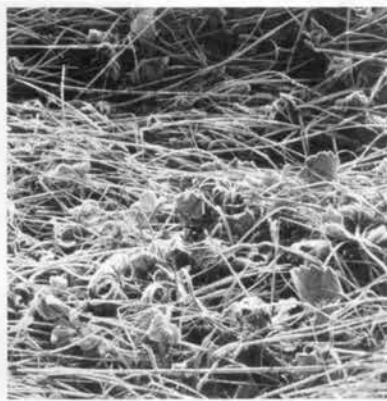
まった射手座付近が北穂高岳から湖沢岳の空にさしかかりました。見事な星明かりです。私はレンズに霜が降りなければよいがと気にしながら、銀河が流れて写るように、長時間シャッターを開いて撮影しました。

今、そのときに撮影した星の写真を見ながら、便りを書いています。山の天気はどう変わるのかわからないものだ、つくづく感じています。

数日前から、標高二〇三五メートルの王ヶ頭に建つ高原荘に泊まっているのですが、今日はよく晴れて、目の前には真白い美ヶ原の溶岩台地が広がり、南アルプス、富士山、八ヶ岳、浅間山などが一望できました。

実は、このオーナーの小澤さんは友人であり、いつもお世話になっているのです。今回も、冬景色を撮りに来てはどうかと、呼んで下さったのです。

ジープと雪上車を使い継いで厳冬の美ヶ原へやってきた甲斐があつて、今朝はダイヤモンドダストが撮れました。ダイヤモンドダストは、大気中を降りてくる細かい氷の結晶が日光に輝いて見えるときのことを言うのですが、それほど寒さが厳しくない安曇野では出会ったことがなかっただけに、ドキドキしました。何千、何万の光の粒がキラキラと漂いながら降りてくる美しさは、たとえようがありません。どのように撮れたのか早く見たいので、明日は下山するつもりです。



葉には行く秋を感じるし、枯草に降りた霜には、冬がすぐ隣まで来ていることを感じます。

安曇野で初めて星空を撮影したのは、ハレー彗星です。もう十数年も前ですが、夜明けの星空にハレーを入れて撮影するにはこの山がよいのか方位や高度を地図で調べた結果、美ヶ原へ向かいました。

果たして、再び宇宙のかなたに旅立つてゆくハレー彗星が、たくさんの星が煌めく八ヶ岳の上で、かすかに白い尾を引いているのでした。

それから、綺麗な星空が見える夜は、星空の写真を撮っています。星空は、四季それぞれに表情が違っていました。たとえば、ピンと冷たい空気が張りつめた冬は、辺りがちらちらして見えるほど、星がまたたくこともありません。また、目を疑うほどたくさんの星がきらめいていて、それは星が降ってくるように見え、そんなとき私は、安曇野は星の降る里だと感じるので。



**山と博物館第43巻第4号**

一九九八年四月二十五日発行

発行 千穂長野県大町市大字大町八〇五六一  
大町山岳博物館

TEL 〇二六一一二二一〇二二一

印刷 大糸タイムス印刷部

定価 年額 一、一五〇円(送料共) 切手不可

郵便振替口座番号 〇〇四一七二二三九三